

第208回（令和4年11月27日施行）

1 級原価計算・工業簿記

第1問

従来通り「原価計算基準」の内容からの出題ですが、受験生は決して勘に頼った解答をせず、よく吟味して解答をしてほしいものです。今回は、基本的な用語や原価計算手続きに関する箇所を中心に出题しました。また、計算問題も一問だけ用意しました。単に「原価計算基準」を丸暗記するのではなく、基本概念を中心に理解してもらいたいものです。

1. 「原価計算基準」七からの出題です。実際原価計算の計算手順を確認してください。
2. 「原価計算基準」二一からの出題です。
3. 「原価計算基準」三六からの出題です。部門別個別原価計算における作業くずのケースで考えれば、作業くずが共通的に発生している場合はその評価額を部門費から控除します（原則的処理法）。しかし、作業くずが特定の製品の製造から発生していることが明確な場合は、その製造指図書に直接材料費や製造原価から控除します（例外的処理法）。今回は第4問でこの処理方法が問われています。確認してみてください。
4. 「原価計算基準」四七の（一）からの出題です。
5. 「原価計算基準」四の（三）からの出題です。部分原価という用語はあまり用いられていませんが、直接原価計算といえばわかると思います。「原価計算基準」のこの部分を借りて、その直接原価計算における計算構造の理解を問いました。
6. 5. を計算問題化した出題です。損益分岐点における売上高は、固定費を貢献利益率で除すると求められます。固定費をちょうど貢献利益で回収し終えた売上高が損益分岐点売上高となるからです。

本問では、貢献利益率が次のように45%と計算されます。すなわち、貢献利益が $\text{¥}5,000,000 - \text{¥}2,600,000 - \text{¥}150,000 = \text{¥}2,250,000$ なので、 $\text{¥}2,250,000 \div \text{¥}5,000,000 \times 100 = 45\%$ となります。

したがって、損益分岐点売上高は、 $(\text{¥}690,000 + \text{¥}300,000) \div 45\% = \text{¥}2,200,000$ と計算されます。

第2問

製造業における仕訳の問題です。今回はすべて最近の過去問題を参考に出題してあります。

1. 間接材料の消費額の計算方法であるである棚卸計算法に関する問題です。消費額は $\text{¥}458,000 + \text{¥}3,963,000 - \text{¥}471,000 = \text{¥}3,950,000$ となります。勘定科目に注意してください。工場消耗品勘定を使います。間接材料なので、製造間接費勘定へ振り替えます。類題としては、例えば、205回に同様の問題が出題されています。

2. 労務費の予定賃率による消費額の振替関係を理解しているかを問う問題です。基本的な問題と考えられます。手待時間は間接労務費の扱いになることに注意してください。本問での間接労務費は、 $\text{¥}820 \times (450 + 60) \text{ 時間} = \text{¥}418,200$ となります。類題としては、例えば、200 回に同様の問題が出題されています。
3. 工程別総合原価計算において、主産物と副産物が分離される際の問題です。主産物は製品勘定へ振り替えられ、副産物は評価額を副産物勘定に振り替えます。なお、貸方科目は第 2 工程仕掛品になることに注意してください。類題としては、例えば、199 回に同様の問題が出題されています。
4. 組級別総合原価計算における、組間接費の配賦に関する基本的な問題です。3 : 7 の割合で各組製品（実際には各組仕掛品勘定）に振り替えます。類題としては、例えば、198 回に同様の問題が出題されています。
5. 得意先への製品販売後の返品に関する問題です。25 個分の売価と製造原価を計算できるかがポイントになります。製造単位原価は $\text{@¥}2,200$ なので、製品 1 個当たりの売価は $\text{@¥}2,200 \times 130\% = \text{@¥}2,860$ となります。したがって、売上は $\text{@¥}2,860 \times 25 \text{ 個} = \text{¥}71,500$ に、売上原価は $\text{@¥}2,200 \times 25 \text{ 個} = \text{¥}55,000$ となります。返品なので販売時の仕訳の逆仕訳になります。類題としては、例えば、201 回に同様の問題が出題されています。
6. 本社工場会計の工場側の仕訳です。保険料の支払いについてはすべて本社側でおこなうため、現金勘定は用いない点に注意してください。さらに勘定科目選択欄に保険料勘定が無いことから、製造間接費勘定に直接振り替えることとなります。類題としては、例えば、198 回に同様の問題（ただし、減価償却費のケース）が出題されています。

第 3 問

第 190 回以降出題されなかった標準原価計算の勘定記入の問題です。直接材料費部分だけを勘定記入する点に注意してください。

材料はすべて製造工程の始点で投入しているため、加工進捗度は不要になります。

前月繰越額： $\text{¥}980 \times 480 \text{ 個} = \text{¥}470,400$

当月完成分： $\text{¥}980 \times 6,140 \text{ 個} = \text{¥}6,017,200$

次月繰越額： $\text{¥}980 \times 540 \text{ 個} = \text{¥}529,200$

問題は標準原価差異部分です。価格差異と数量差異に分けて記入する必要があるため、次のように計算します。材料の実際消費単価は、 $\text{¥}6,162,300 \div 8,350 \text{ kg} = \text{¥}738$ となります。

また、当月投入分は $6,140 \text{ 個} - 480 \text{ 個} + 540 \text{ 個} = 6,200 \text{ 個}$ になります。

価格差異： $(\text{¥}700 - \text{¥}738) \times 8,350 \text{ kg} = \triangle \text{¥}317,300$ （借方差異・不利差異）

数量差異： $(1.4 \text{ kg} \times 6,200 \text{ 個} - 8,350 \text{ kg}) \times \text{¥}700 = \text{¥}231,000$ （貸方差異・有利差異）

最後に開始記入をすることも忘れないでください。

第4問

比較的よく出題される原価の部門別計算から出題しました。今回は、第200回で出題された問題を参考にしました。

いつも指摘しているのですが、受験生が問題を見た時に、実際の製造工程が想像できるような具体例を使って出題するように心がけました。今回はオリジナルの木工品を個別受注しているケースを想定しました。製造部門として切削部門と組立部門を出したのもそういう理由からです。

問題自体は過去問題をやっておけばほとんど解けるようにしましたが、工業簿記の一巡を理解してもらおうという目的を考え、製品の販売で終わらずに月次損益勘定への振り替えまで問いました。また、製造部門費に関して予定配賦を採用していますが、これについてもただ計算して終わりというのではなく、その結果の分析という重要なプロセスについても考えてもらいたく、部門費差異の要因分析も出題しました。「なぜ差異を計算するのか」という理由について考えてみてください。